

一 次の——線部のカタカナを漢字に直して書きなさい。

- ① テレビの音量をチヨウセイする。
- ② スイソクだけで判断してはいけない。
- ③ シンコクな問題をかかえる。
- ④ 会議の進行にシショウが出る。
- ⑤ 将来はケンチクの勉強をしたい。
- ⑥ 大きくゆつくりとコキユウする。
- ⑦ 毎日のトクンの成果があらわれた。
- ⑧ 明日は弟のタンジヨウ日だ。
- ⑨ ソナえあればうれいなし。
- ⑩ 学級委員をツトめる。

二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

日本人は自己主張が苦手だと言われる。(注1)グローバル化の時代だし、もっと自己主張ができるようにならないといけないなどと言う人もいる。でも、日本人が自己主張が苦手なのは理由がある。そして、^①それはけつして悪いことではない。では、アメリカ人は堂々と自己主張ができるのに、僕たち日本人はなぜうまく自己主張ができないのか。それは、そもそも日本人とアメリカ人では自己のあり方が違っていて、コミュニケーションの法則がまったく違っているからだ。

アメリカ人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は、相手を説得し、自分の意見を通すことだ。お互いにそういうつもりでコミュニケーションをするため、遠慮のない自己主張がぶつかり合う。お互いの意見がぶつかり合うのは、日常茶飯事のため、まったく気にならない。

一方、日本人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は何だろう。相手を説得して自分の意見を通すことだろうか。そうではないだろう。僕たちは、自分の意見を通そうというより前に、相手はどうしたいんだろう、どんな考えなんだろうと、相手の意向を気にする。そして、できることなら相手の期待を裏切らないような方向に話をまとめたいと思う。意見が対立するようなことはできるだけ避けたい。そうでないと気まずい。

つまり、僕たち日本人にとっては、コミュニケーションの最も重要な役割は、お互いの気持ちを結びつけ、良好な場の雰囲気を醸し出すことなのだ。強烈な自己主張によって相手を説き伏せることではない。

だから自己主張の(注2)スキルを磨かずに育つことになる。自己主張が苦手なのは当然なのだ。その代わりに相手の気持ちを察する共感性を磨いて育つため、相手の意向や気持ちを汲み取ることがができる。

相手の意向を汲み取って動くというのは、僕たち日本人の行動原理といってもいい。コミュニケーションの場面だけではない。たとえば、何かを頑張るとき、ひたすら自分のためというのが欧米式だとすると、僕たち日本人は、だれかのためという思いがわりと大きい。

親を喜ばせるため、あるいは親を悲しませないために勉強を頑張る、ピアノを頑張る。先生の期待を裏切らないためにきちんと役割を果たす。そんなところが多分にある。大人だって、監督のために何としても優勝したいなんて言ったりするし、優勝すると監督の期待に応えることができてホッとしていると言ったりする。

自分の中に息づいているだけかのために頑張るのだ。もちろん自分のためでもあるのだが、自分だけのためではない。このような人の意向や期待を気にする日本的な心のあり方は、「他人の意向を気にするなんて自主性がない」とか「自分がない」などと批判されることがある。でも、それは欧米的な価値観に染まった見方に過ぎない。

③ 教育心理学者の東洋は、日本人の他者志向を未熟とみなすのは欧米流であって、他者との絆を強化し、他者との絆を自分の中に取り込んでいくのも、ひとつの発達の方角性とみなすべきではないかという（東洋『日本人のしつけと教育——発達の日米比較にもとづいて』東京大学出版会、一九九四年）。

④ そもそも、欧米人と日本人では自己のあり方が違う。僕たち日本人が、率直な自己主張をぶつけ合って議論するよりも、だれも傷つけないように気をつかい、気まづくならないように配慮するのも、欧米人のように個を生きているのではなくて、関係性を生きているからだ。

心理学者のマークスと北山忍は、アメリカ的な独立的自己観と日本的な相互協調的自己観を対比させている。

独立的自己観では、個人の自己は他者や状況といった社会的文脈から切り離され、そうしたものの影響を受けない独立な存在とみなされる。そのため個人の行動は本人自身の意向によって決まると考える。

それに対して、相互協調的自己観では、個人の自己は他者や状況といった社会的文脈と強く結びついており、そうしたものの影響を強く受けるとみなされる。そのため個人の行動は他者との関係性や周囲の状況に大いに左右されると考える。

このような相互協調的自己観をもつ僕たち日本人は、個としての自己を生きているのではなく、関係性としての自己を生きている。関係性としての自己は、相手との関係に応じてさまざまに姿を変える。その場その場の関係性にふさわしい自分になる。相手との関係性によって言葉づかいまで違ってくる。欧米人のように相手との関係性に影響を受けない一定不変の自己などというものはない。

「だれが何と言おうと、私はこう考える」「僕はこう思う」と自分を押し出していく欧米社会では視線恐怖があまり見ら

れないのに対して、自分を押し出すよりも相手の意向を汲み取ろうとする日本人の間には視線恐怖が多い。それは、僕たち日本人は、⑤ 相手との関係性によって自分の出方を変えなければならないからだ。

相手がどう思っているかが気になる。こんなことを言ったら相手はどう感じるだろうかと気になる。それも、僕たちが関係性としての自己を生きているからだ。

僕たちの自己は、相手から独立したのではなく、相手との相互依存に基づくものであり、間柄によって形を変える。僕たちの自己は、相手にとっての「あなた」の要素を取り込む必要がある。だから相手の意向が気になる。相手の視線が気になるのだ。

個を生きているのなら、自分の心の中をじっくり振り返り、自分のしたいことをすればいいし、自分の言いたいことを言えばいい。相手が何を思い、何を感じているかは関係ない。自分が何を思い、何を感じているかが問題なのだ。自分の思うことを言う。自分が正しいと考えることを主張する。自分の要求をハッキリと伝える。それでいいわけで、じつにシンプルだ。

でも、関係性を生きるとなると、そんなふうにシンプルにはいかない。自分の意見を言う前に相手の意向をつかむ必要がある。気まづくならないようにすることが何よりも重要なので、遠慮のない自己主張は禁物だ。相手の意見や要求を汲み取り、それを自分の意見や要求に取り込みつつ、こちらの意向を主張しなければならぬ。

⑥ このように、関係性としての自己を生きる僕たち日本人は、たえず人の目を意識することになる。

（榎本 博明『「自分らしさ」って何だろう？ —自分と向き合う心理学』より）

（注1）グローバル化Ⅱ政治・経済・文化などが国境を越えて地球規模で広がること。

（注2）スキルⅡ技能。

問1 — 線部①「それはけつして悪いことではない」とありますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 欧米人のような自己主張が苦手なかわりに、相手の考えを読み取るという感性が養われているから。
- イ. グローバル化の時代においては、自己主張ができる人に従うだけで十分に成功することができるから。
- ウ. うまく自己主張できないからこそ、相手がいちらの意見に真剣に耳を傾けてくれる可能性が生まれるから。
- エ. 自己主張するのが苦手でも経験を積むことによって、その能力を向上させることができるから。

問2 — 線部②「日常茶飯事」とありますが、この言葉の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 意味のないつまらないこと。
- イ. 大切に欠かせないこと。
- ウ. ごくありふれていること。
- エ. だれもが納得していること。

問3 — 線部③「教育心理学者の東洋」とありますが、この「教育心理学者の東洋」のことは筆者は何のために用いているのですか。その目的の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 日本人は子どもたちから自分が尊敬する偉人についての伝記をよく読み、その人の人生から多くのことを学んでいる、そのことが日本から世界的な人材を生み出す力になっていると説くため。
- イ. 自分の周りにいる仲間とのつながりを強くし、自分の欲望をおさえて、自分の発言も仲間とくいちがわないように合わせていかなければならないと日本の子どもが教育されていることが、現代では適切でないと説くため。
- ウ. 自分が何かをなしとげようとする時、自分の前に立ちはだかる競争相手をよく研究して、その相手から色々なことを学びとるように子どもたちから教育されている日本人は、外国を相手にしても競争に勝つと説くため。
- エ. 周囲の人への思いを大切にしながら、目標を立て、成果をあげること、その人々の思いにこたえなければならぬと思っている日本人は欧米人にひけをとることもなく、そういう育ち方にも価値があると言っているため。

問4 — 線部④「欧米人と日本人では自己のあり方が違う」とありますが、「欧米人」「日本人」は「自己」についてそれぞれどのように考えているのですか。本文中のことは使いつつながら、八十字以内で説明しなさい。(句読点などの記号も字数にふくめます。)

問5 — 線部⑤「相手との関係性によって自分の出方を変えなければならない」とありますが、「相手との関係性によって自分の出方を変え」とはどうすることですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 自分の信念を貫き通すために、一時的にその信念を曲げることになっても相手に合わせるふりをする。
- イ. 相手が自分をどう見ているかを気にしながら、その意向を損ねることのないように自分の態度を変えていく。
- ウ. 相手の社会的立場に応じて、意見を主張して相手を言い負かすか、それとも相手の意見に従うか態度を変える。
- エ. 自分がどう見られているのかを気にして、同じ相手に対してもその時々で自分の態度を次々に変える。

問6 — 線部⑥ 「関係性としての自己を生きる」とありますが、この「関係性としての自己を生きる」例としてふさわしいものはどれですか。適切な例を次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 海外旅行でロンドンに行くことになり、以前そこで暮らしていたことのある知人に現地のことを聞く。
- イ. 昼食にカレーが食べたかったが、辛い食べ物に苦手な友人と一緒にだったのでハンバーガーショップに入る。
- ウ. 前から欲しいと思っていたゲームを親に買ってもらうために、しっかり勉強して試験でいい点数をとる。
- エ. お気に入りの服を着ていこと出かけたとき「似合っていない」と言われたので、それ以降着ないことにする。
- オ. 自分とクラスメイトのどちらが運動会の委員長になるか話し合っても決まらず、先生に助けを求める。

三

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

志音は、友達づきあいが苦手な高校一年生の女の子です。両親は彼女が小さい頃に離婚し、母親と暮らしてきました。志音は中学二年生の時、バンドのドラム奏者になるという夢をかなえた父と再会しますが、その父は志音が中学三年生の時、メジャーデビューを目前にして亡くなりました。遺品の日記に書かれていた「志音、大志を抱いて生きろ」という言葉が、志音の心には強く残っています。

志音には幼い頃から仲良しだった瑠璃ちゃんという友達があります。一緒に中高一貫の進学校に通っていましたが、志音は別の高校を受験し、入学しました。高校に入学して間もないある日、志音は学校の屋上で、ドラムをたたく練習をしているところを吹奏楽部の部長である大志に目撃され、部に勧誘されました。

以下はその翌日の昼休み、志音が大志に再会する場面です。

母が持たせてくれた弁当箱を開ける。今日のおかずは醤油の入った茶色い卵焼きと、焼き鮭。

その瞬間、多分、一年くらい忘れられないあの声が出た。

「やっぱりここかあっ！」

箸を落としそうになった。

彼は梯子から顔を出し、昨日と同じように志音を見ていた。

耳が熱くなった。

「いいところで弁当食べてるじゃない。俺も一緒に食っていい？」

そう言っ、安息の場に足を踏み入れようとする。ああ、ここも駄目だった。奪われた。肩間に皺を寄せて、広げればかりの弁当箱をしまう。出来ることなら、死ぬまで顔を合わせたくなかったのに。

「一緒に飯食う友達、いないの？」

志音から少し距離を取って彼は腰を下ろした。弁当を広げ、本気で志音と一緒に昼ご飯を食べるつもりだ。場所を変えようと腰を浮かせた瞬間、白米を口に運びながら彼は言った。

「まだ学校始まってから一週間だし、(注1)スロースターターには厳しい時期だよな。仲良しグループとかできちゃって」言葉の端々がちくりちくりと胸に刺さる。①「思わず、浮かせた腰を元に戻した。」

「いきなりよく知りもしない奴と仲良くしろ、なんてできない奴だっているよ」

そうだ。そうなのだ。知らぬ間に仲のいいグループができあがっていく。自分はその輪に入っていくのが他の人より遅い。踏み込めないでいる間に、志音が入るスペースはなくなってしまう。中学一年のときもそうだった。けれどあの頃は、教室は違えど同じ学校に瑠璃ちゃんがいた。

「気の合う奴ってのは、どんなに時間がかかっても自然と引き合うもんだって」

確かに自分にもそう思っていた頃があったはずだ。小学校では、中学校では、きっと瑠璃ちゃん以外にも友達ができるはずだ。

高校でこそは、とは微塵も思わなかった。

「弁当、食わないのか」

箸を持ったきり動かない志音の右手に、彼の視線が注ぐ。仕方なく、箸の先を卵焼きに突き刺した。醤油味の卵焼き。少し黒ずんだ黄色。味が濃くて冷めても美味しいのが母の自慢だ。

「卵焼き入ってるな。甘い奴？ しょっぱい奴？」

突然そう言って、彼は自分の卵焼きを箸で掴んで志音に見せた。

「俺、醤油とか出汁で作るしょっぱい卵焼きが好きなんだけど。うちの家族は全員甘い卵焼きが好きで、絶対に弁当に入れてもらえないのよ」

答えない志音に、彼は苦笑いを向ける。そして短く息を吐いて、少し頬に力を込めたのがわかった。遠回りはやめた。直球で行こう。そんな顔だ。

②「弁当、ずっとここで食べるの？」

雨の日も、風の日も？ ひどく悲しい顔で、彼は志音を見る。まるで自分自身が雨に打たれて弁当を食べているのを想像しているようだった。

「部活は無理って言ってたけど、他に何かやりたいことでもあるの。バイトとか」

もしあるなら、もう誘うのは止めるよ。続けて発せられたその言葉に、胸が痛くなった。この言い方、覚えがある。父だ。懐かしさと同時に、憎らしささえ覚える。大志を抱いて生きる。その言葉は確かに志音に届いた。志音を貫いて、大きな大きな修復しようのない穴を開けて、どこかに行ってしまった。

「別に、ないです」

卵焼きを持ち上げたまま、食べるでもなく弁当箱に戻すでもなく、くるくる回す。

「吹奏楽部に、ほんのちよつとでもいいから、興味はない？ 昨日も言った通り、うちの部には打楽器が必要なんだ。けれど人数が少ない。吹奏楽ってさ、どうしたって人数で勝負って部分があるんだ。うちの部はその点では、スタートからめちゃくちゃ不利なわけ」

そこでだ。声のトーンが上がった。

「うちの部にドラムを叩ける奴がいればどうだろうって考えた。そして昨日、君を見つけた」まさにこれは運命なんだよ、とでも言いたげな、キラキラした目。

「シンバル、(注2) バストドラ、スネア。一人で出来る奴がいれば、演奏に厚みが出る。強い演奏になる」

気がついたら、彼がさっきよりずっと近くに來ていた。弁当を床に置いて、志音の顔を覗き込む。後退りすると、また一歩近づいてくる。また後退ったら、給水塔の柱に頭をぶつけた。衝撃で箸から卵焼きが膝の上に落ちた。

「大丈夫？」

笑い混じりに聞かれる。答えられないのは、痛みのせいだけじゃない。

「ドラムはいいアイデアかもしれないですけど、誘う相手を間違ってます」

そんな言葉が口について出た。そうだ、間違っている。少なくとも、そういう誘いをする上で自分ほど相応しくない人間

はいない。志音はスカートの上に落ちた卵焼きを見つめた。黒ずんだ黄色い卵焼きを。

「間違ってます」

「何がどう間違ってるんだ」

喰い込み気味にそう返される。

「少なくとも、うちの打楽器パートの奴よりドラムの技術はあると思う。入部しても、他の部員と仲良くやっていけないってことか？」

なら安心しろ。彼はそう笑って、自分の右手を差し出した。

「俺が君の、高校生活最初の友達になってやるよ」

俺達を助けてくれないか。そう言つて志音に握手を求め。自分と彼の間を風が吹き抜けていった。山から湖に向かって、

鋭い風が。

「A ごめん。なつてやるよなんて、いくら先輩でも偉そうだな」

友達になつてください。

再び差し出される手を、その掌を、しばらく見下ろしていた。どうしてだろう、瑠璃ちゃんを思い出した。藤棚の下で

志音にこうやって手を差し出した幼稚園児の瑠璃ちゃんを。

応えないでいた志音の手を取つて、日向へと連れ出した瑠璃ちゃんを。

県立高校へ行くとは、瑠璃ちゃんになかなか言えなかった。やっと伝えられたのは二月。放課後の、誰もいなくなった教室で。願書は、どつくに出していた。

室で。願書は、どつくに出していた。

B ごめんね、と先に謝つてから、言つた。本当のことは言えなかった。「もう、勉強について行けなくて」と(注3)自嘲しながら、もつともらしいことを言つた。自分が心底情けなかった。

瑠璃ちゃんは泣いた。

『勉強なんて、しーちゃんより成績悪い子、いっぱいいるじゃない』

そういうんじゃない。もうきつくて、無理そうなの。そんな志音の言葉に、瑠璃ちゃんは首を左右に振つた。

言い訳はたくさん用意していた。頑なに瑠璃ちゃんの励ましを拒絶し、「もう決めちゃつたから」と繰り返した。

長い長い沈黙の末に、瑠璃ちゃんは「C ごめん」と、話を切り出したときの志音と同じ言葉を溢した。

『親友なのに、全然、気づかなかつた』

(注4) おれが言わなかつたんだもの。瑠璃ちゃんが気に病むことないよ。そう言つて宥めたのに、瑠璃ちゃんの涙は止まらなかつた。少しだけ、それを嬉しいと思つた。

喜びと一緒に、胸の奥からぼんやりとして、それでいて濁つた感情が湧き上がってくるのがわかつた。もやもやとした、何とも気持ちの悪い感情だつた。

耳の奥に響くような強い風が山から吹いてきて、志音の意識は過去から現在へと引き戻された。

目の前には、瑠璃ちゃんのものとは似ても似つかない男子生徒の掌があつた。生命線が長い。大きくてごつごつとしていてけれど、指が長くて爪が綺麗だ。

無意識に、箸を置いていた。あとちよつと、ちよつとだけ腕を上げれば、この手を取れる。そう思つたとき、風に揺られて箸がカチャリと音を立てた。

D 「……ごめんなさい」

何とか、喉の奥から言葉を絞り出した。それでも彼は粘つた。手を差し出し続けた。けれどももう、志音の腕は上がらない。膝の上で石にでもなつたように動かない。

「残念だな」

そんな声と共に、手が引つ込む。俯いたまま、志音の目はそれを追つた。

その手が生徒手帳を掴んで、再び志音の目の前に現れる。一ページ目を広げてみせる。顔写真が貼られ、氏名、生年月日、住所、発行年月日がかかれていた。

「三年一組二十七番。日向寺大志」

ああ、何て、何て名前だ。

「吹奏楽部の部長をやつてます」

にいつと歯を見せて、彼の手は、大志の手は、志音のスカートに落ちた卵焼きを拾う。ほんのり醤油の匂いがするそれを、ひよいと自分の口に放り込んだ。

「いいね、いいあんべえのしよっぱさ」

お礼にこつちをやる。そう言つて、大志は逆さ箸で自分の卵焼きを志音の弁当箱に入れた。

「また来るよ」

残っていたおかずを一気に平らげて、大志は鞆を持つ。志音を見下ろして、笑つた。笑つたまま、梯子を下りていく。階段へ続くドアが開く音、閉まる音。階段を下りる音。どんどん、小さくなつていく。

屋上は変わらず風が吹き抜ける。山から湖に向かつて、迷うことなく流れていく。一人残され、志音は弁当箱を見下ろしていた。彼の卵焼きは、綺麗な、優しい優しい、クリーム色をしていた。

(額賀 濤『屋上のウインドノーツ』より)

(注1) スロースターター||立ち上がりが遅く、調子が出るまでに時間がかかる人。

(注2) バスドラ・スネア||たいこの種類。

(注3) 自嘲||自分で自分をばかにして笑うこと。

(注4) おれ||志音が暮らすあたりでは女性でも自分を指して用いる。

問1 — 線部①「思わず浮かせた腰を元に戻した」とありますが、志音はなぜそうしたのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 相手の言っている言葉が自分にびたりと当てはまり、自分の教室での状況をみすかされたかのように思われて、そこから立ち去れなくなったから。

イ. 部活のことだけではなく、自分に対する興味を相手を持っていることがわかって、この人なら自分を仲良しグループに入れてくれるかもしれないと期待したから。

ウ. 部長である大志には部活の仲間もたくさんいるはずなのに、一緒に弁当を食べようと誘うところを見ると、実は自分と同じようにひとりぼっちなのではないかと思つたから。

エ. 自分の全てを知っているかのように投げかけられる言葉のひとつひとつが気に入らず、このまま一言も抗議することなく去ることがためらわれたから。

問2 — 線部②「弁当、ずっとここで食べるの？」とありますが、ここで大志が志音に言おうとしていることはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. ここは風が吹き抜けて心地よいが、雨の日もあるだろうから食事場所とするのはやめたほうがいいだろう、ということ。

イ. 部活に入らないかという話がしたいと思つているので、できれば食事を中断してほしい、ということ。

ウ. 自分と同じようにひとりぼっちならば、これからも似た者同士でここで一緒に弁当を食べないか、ということ。

エ. 友達や仲間を作らずにひとりぼっちで高校生活を送るのはつらいことだが、それでも構わないのか、ということ。

問3 Ⅱ線部A「ごめん」・B「ごめんね」・C「ごめん」・D「ごめんなさい」は、それぞれどういうことばですか。その説明として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア. 相手に対して言いにくいことを切り出すための口火をきることば。

イ. 相手の誘いを断るとともに、相手の気持ちを素直に受け入れられない自分のふがいなさを残念に思うことば。

ウ. 自分の発言に対する反省をこめて、素直に謝っていることば。

エ. 考えてみれば自分の方にも落ち度があったことに思いあたって謝ろうということば。

問4 Ⅰ線部③「自分が心底情けなかった」とありますが、志音が情けなさを感じたのはどういうことについてですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 幼い頃からずっと一緒だった瑠璃ちゃんに対してさえ、自分が別の高校に行く本当の理由を言えなかったこと。

イ. 自分のことをあれこれ気にかけてくれた瑠璃ちゃんに相談することなく、別の高校に行くことを決めたこと。

ウ. これまで仲良くしてくれた瑠璃ちゃんに何の恩返しもできないまま、離ればなれになってしまうこと。

エ. たった一人の親友だった瑠璃ちゃんにまで、勉強ができなくて苦労しているという弱みを見せたこと。

問5 本文の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 正しいと思ったことをとことん貫こうとする大志の誘いによって、人間関係を作ることに臆病になっている志音の心が少しづつ解きほぐされていく様子が、テンポのよい会話のやりとりによって表現されている。
- イ. 単純な性格で、一つのことを考え始めると他のことを考えられなくなる大志にやささかうんざりしつつも、何とか新しい学校で自分の居場所を見つけようと頑張る志音の姿が、たくみな心情描写によっていきいきと書かれている。
- ウ. 明るく人なつこくて、思い立ったら突き進む行動力がある大志と、人づきあいが苦手で自分に自信を持ってない志音の部活動をめぐるやり取りが、山から吹き抜ける風をアクセントにしながら志音の視点を中心に描かれている。
- エ. 吹奏楽部の部長をしている朗らかな性格の大志と、過去のつらい経験から学校生活になじめずがでさず孤独感を強めていく志音との心のぶつかり合いを、両者の心情を交互に表現することによって強調している。

問6 あなたは志音がこの後、吹奏楽部に入ると思っていますか。それとも入らないと思いませんか。解答さんの「入る」もしくは「入らない」に○をつけ、そう考える理由を本文中の表現を使いながら八十字以内で説明しなさい。(句読点などの記号も字数にふくめます。)

(おわり)